

L・フレース 『書簡に見るプルースト像』

今川, 泰隆

<https://doi.org/10.15017/9980>

出版情報 : Stella. 16, pp.143-145, 1997-07-01. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

L・フレース『書簡に見るプルースト像』

今 川 泰 隆

フィリップ・コルブ編纂によるプルースト書簡集は1993年、第21巻の刊行をもって完結した。コルブの綿密な調査のおかげでプルーストの手紙による対話の全貌がほぼあきらかになったといえよう。今やわれわれは豊富な註解を参照しつつ5千通にもおよぶ書簡を味読する悦びだけではなく、年代順に配列された資料をもとに作家の生涯をたどりなおし『失われた時を求めて』の創作過程にあらたな光を投げかける契機をえた、そういっても過言ではあるまい。本書『書簡に見るプルースト像』は、まさにこのような巨きな研究成果を背景に企図された野心的な試みにほかならず、小説の叙述からはうかがいしれない作家の諸側面を手紙の精緻な分析をとおして浮かびあがらせることに見事に成功している¹⁾。しかしながら本書を「野心的」と呼ぶる所以は、ひとえに専門分野の関心の枠内にとどまらず、広く文学研究の場に〈書簡〉への斬新なアプローチを提出するという著者フレースの密かな意図が読みとれる点にある。

さて分析にあたっては大きく分けて3つの視点が導入されているのだが、それぞれが3部構成からなる本書の柱となっている。まず「Une personnalité d'un écrivain」と題された第1部では、作家の個性とテキストの構築との関係に焦点があてられる。第1章は、書簡におけるプルーストの性格や資質についての自己描写的な記述をたよりに、作家自身の精神的な成熟過程が『失われた時』の主人公の生涯にどのように反映されているかを説明する。つづく第2章の考察は両親をはじめとするプルーストの近親者に及び、彼らが作家の想像世界に占める位置について多くを示唆してくれよう。第3章では、プルーストの手紙に頻出する健康問題にかんする記述がクローズアップされ、病気と創作の関係が解明される。フレースは病状悪化にともなう晩年の隠棲生活が『失われた時を求めて』の創造の場であるとともに、ほかならぬその起源ともなっていることを説得的に証明していく。さらに第4章では、手紙を書く主体として

のプルーストの精神活動から無意志的記憶にかかわる心理のメカニズムを抽出するという作業をへて、そのメカニズムが小説の美学形成に密接にかかわっていることが解き明かされる。

周知のように晩年のプルーストは創作に専心するあまり、昼夜が逆転するいわば蟄居生活をおくっていた。とはいえ世相に無関心で外界との交流を一切断っていたわけではけっしてなかった。彼はさまざまな社会的事象にたいして敏感な反応を見せているし、またその文通相手もじつに多岐にわたっている。第2部《L'écrivain public》ではそういったプルーストの交友関係と社会への関心が主題にとりあげられる。第1部とは一転して作家の個性を外側からとらえる試みといえよう。著者はまず第1章で、書簡の交流におけるプルーストの語り口やことば使いを分類し、その多様さこそが小説の登場人物たちのそれぞれに特有な言語を準備させるものであったことを指摘する。つづく第2章では、同時代の社会的・歴史的な重大事件（ドレフュス事件や政教分離案、さらには第一次世界大戦）をまえにしたプルーストの反応がとりあげられているが、宗教や政治についての作家の見解を書簡にさぐったのち、翻ってその反映を小説のなかに見いだしていく著者の手際はじつにあざやかなものだ。

第3部では、《L'écrivain au travail》という題にうかがわれるように、作家の創作活動が考察の対象となる。まず第1章は、プルーストが『失われた時を求めて』の創作へといたる過程を手紙の記述によってたどろうとする試みだ²⁾。小説を書くという使命はいつごろ作家にめばえたのか。読者はフレースの案内のもと書簡をたよりに、リセ時代にはすでに芸術的理想の実現に思案する作家の先駆がみとめられることを知ることになる。また最終章ではプルーストがいかにして独自の文体を獲得したかという問題が論じられている。

以上の簡略な要約によってもただちに了解されるように、フレースは包括的な視点から書簡をとらえなおす作業をつうじて作家の実像に鋭くせまると同時に、文学創造のありようをも深くさぐっている。たしかにプルーストが手紙のなかに残した証言は伝記的研究や生成研究の分野においてこそ事実確認や草稿類の日付確定のための手段としてすでに重要視されてはいる。しかしながら書簡そのものについての研究はいまだ十分になされているとはいいがたい。このような現状を考えあわせるならば、本書の試みは意欲と独創にとんだ貴重な貢献と呼べるであろう。

註

- 1) Luc FRAISSE, *Proust au miroir de sa correspondance*, Paris : SEDES, 1996. 著者フレース（現ストラスブール第2大学助教授）にはこのほかにも以下の著作がある——*L'Œuvre cathédrale. Proust et l'architecture médiévale*, Paris : José Corti, 1990; *Lire «Du côté de chez Swann»*, Paris : Dunod, 1993; *L'Esthétique de Proust*, Paris : SEDES, 1995. なお本書のタイトルはここでは便宜的に「書簡に見るプルースト像」と訳した。
- 2) 同様の観点から、たとえば吉田城は、とりわけプルーストの青年期における手紙の精緻な読解をとおして、若者が大作に向かいゆっくりとしかし着実に歩んでいくさまをあざやかに描きだしている（吉田城『対話と肖像——プルースト青年期の手紙を読む』、青山社、1994年）。また昨年出版されたジャン＝イヴ・タディエによる伝記も、書簡の証言をふんだんにもりこみ、プルーストの人生における重要な出来事とテキストとを関連させることで、小説の起源と形成過程に鋭く迫っている（voir Jean-Yves TADIÉ, *Marcel Proust*, Paris : Gallimard, 1996）。